

2020 東京オリンピックのキャンプ地を活用した地方創成

～「野球」のまち 徳島阿南市を事例にして～

大阪経済大学 田島ゼミ 3

○小林 巧典 寺澤 佑記 井脇 郷介

1. 政策提言の背景 ～オリンピックキャンプ地の必要性和レガシー～

1-1. 地方に広がる事前キャンプ地

2016年 第31回夏季オリンピック（リオデジャネイロ）では、205カ国の選手が、28競技306種目に参加をした。オリンピックなどのスポーツの世界大会の直前には、開催地では、試合日の数週間前に現地のキャンプ地に入り、コンディションを整える。

ちなみに、2020年の東京オリンピックでは、最大204か国の参加が予想され、33競技310種目が行われることから、最大で6,732か所のキャンプ地が必要になる。当然、すべての国がすべての種目にエントリーすることなく、またすべての参加国が日本で事前のキャンプを行うわけではないので、1/10以下になることも予測されるが、それでも500近くのキャンプ地が必要となってくる。

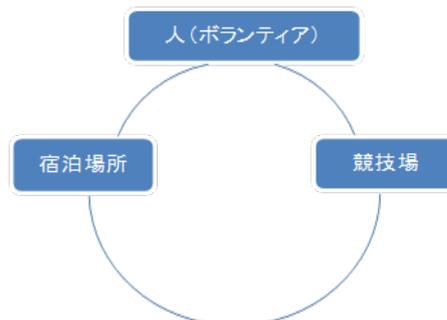
図表1. 必要なキャンプ地数の試算（最大の場合）



日本には47都道府県あるが、500か所と予想しても、単純に1つの県に10近くのキャンプ地が来ることになる。つまり、東京でのオリンピックとはいうものの、日本中のどの地域でもオリンピックを当事者としてかかわる機会があるのが、自国開催の特徴である。

良いキャンプ地として海外のトップチームを迎えるためには、一定の条件を整える必要がある。それは、図表2. にあるとおり、①専用のスポーツ施設、②疲れを癒し、リラックスできる宿泊場所、③地元のボランティアスタッフの3点が必要になると私たちは考えている。

図表2. キャンプ地に求められる3つの要素



1-2. 事例分析 キャンプ地のレガシーとは？

図表 3. 2002FIFAW杯キャンプ地の概要とレガシー

	大分県 中津江村	長野県 松本市
国	カメルーン	パラグアイ
滞在期間	5月24日～31日	5月19日～27日
主な練習施設	鯛生スポーツセンター	信州スカイパーク アルウィン
レガシー	カメルーン杯の開催	Jクラブ設立のきっかけ

2002年FIFA日韓W杯で、大分県中津江村はカメルーン代表。長野県松本市はパラグアイ代表のキャンプ地として利用されたが、どちらも5月下旬にキャンプが行われた。カメルーン代表が使用した鯛生スポーツセンターはW杯後、知名度が上がり、サッカーのメッカとなりつつある。W杯後もカメルーン杯の開催、カメルーンとの交流が続いている。一方、長野県松本市では、パラグアイ代表が練習でアルウィンを利用した。パラグアイ代表GKチラベルトは「なぜ、このようなすばらしいスタジアムがあるのに、プロのサッカーチームがないのだ。」と発言、この発言によって現在の松本山雅FCが誕生した。

1-3. 現状のまとめ

事例分析より、①東京オリンピックには多くのキャンプ地が必要であり、日本全国の町にそのチャンスがある ②キャンプ地には、一定水準のスポーツ施設、宿泊場所、地域の人の支え（ボランティア経験、組織）が揃っているという利点がある。③キャンプ地を上手に活用することができれば、大会以降もその地域に残った遺産（レガシー）を活用して、スポーツを通したまちづくりにつなげることができると考えた。

そこで、本政策提案では、2020年東京オリンピックで復活採用された野球に焦点をあて、野球のキャンプ地として、野球の町として、町づくりに取り組んでいる「徳島県阿南市」について、どのようなレガシーを残し、町を活性化していくことが可能なのか、検討を行った。

2. 政策提案 ～ 野球＝阿南市 を目指して ～

阿南市は、現在「野球のまち阿南構想」として、野球のまち推進課を設置し、少年野球の全国大会の開催、大学野球や北信越地区の高校野球チームの全国選抜大会の直前の強化合宿の誘致などの取り組みを行い「野球といえば、阿南市」というブランド力を持った町づくりを展開しようとしている。

そこで、2020年の東京オリンピックで復活した「野球」のキャンプ地として、2-1.阿南市に何ができるのか、2-2.キャンプ地になれた場合、その経験や資源を生かして、その後何ができるのか という2点を中心に政策提案を行う。

2-1. 野球のキャンプ地として阿南市ができること

球場の「アグリあなんスタジアム」には屋内多目的施設（あなんアリーナ）があり、合宿地・開会式・練習会場として活用することができる。スタジアムには、約 5000 人の収容人員、内野スタンドには 1375 の座席（外野は芝生席）があり、室内投球練習場、磁気反転式スコアボード、照明設備 6 基もあり、十分な設備が整っている。

「アグリあなんスタジアム」は、浅川駅から徒歩 18 分の場所にある。球場の近隣の宿泊施設については、「寿殿 えもと」が球場から 500m の場所にある。ここは宿泊定員 80 名で十分な収容人数だが、球場から近い場所には、まだまだ宿泊施設の数が不足しており、選手、報道陣が想定されると考えると、今後の改善していかなければならない。

さらに、球場、審判員、アナウンスなどが地元のボランティアで対応できる仕組みになっており、すでに野球観光ツアーとして実績もあるなど、地域住民の人的バックアップ体制も充実している。

2-2. 野球のキャンプ地としてのレガシーを活かした政策提案

2. と 2-1. で述べたように、阿南市はすでに、「野球」を通したおもてなし体制が整っていることが分かる。私たちは、これら阿南市が培ってきた資源を、オリンピックキャンプ地になるという機会（誘致した国との継続的な交流や国内外への知名度アップ）を活用して、町の活性化、および町のブランド力向上につながる 3 つの政策を提案する。

①国際交流企画

（概要）

野球を通じて、町の子供たちや大人、町外や県外の人たちと外国の選手やコーチなどと交流して、海外に「阿南市」という地名を知ってもらうことや互いの文化などの交流を行う。

（具体的な施策）

- ・ 1 年に 1 回夏に、1 週間の日程でプログラムを行う。
- ・ キャンプ地として誘致した国の少年、高校、社会人、トップ、女子チームとの交流試合
- ・ 文化交流プログラム

例) 阿南市のとれたての魚介を使った料理や実際に魚をさばく体験

特産品の紹介や温泉に入ってもらふ体験

阿波踊りを含めた祭りをを行い、体験

（政策評価の基準）

- ・ 国際交流プログラムを 10 年間継続する。
- ・ 国際交流をすることで、海外の文化交流や海外への「阿南市」の知名度 UP し、海外の新聞などに阿南市が取り上げられたかを検証する。
- ・ 毎回最後にアンケートを実施し、満足度を 5 段階（5 がとても満足～1 がとても満足でない）で表記し、誘致した国の 8 割を 4 または 5 を獲得する。

②日本国内の競技力向上企画

(概要)

冬でもあまり雪が降らないことを利用して、冬に雪が降り積もってなかなか練習、試合が行えない北海道、東北、北信越地方の高校チームを招待、冬でもキャンプ地として設備が整っている施設で合宿を行う。

さらに、高校のチームで夏の大会でレギュラーに入れなかった選手、いわゆる2軍チームを対象の大会を行う。普段試合にでることのできない選手にとって、甲子園に代わる聖地となることを目指す。

(具体的な施策)

- ・12月、1月、2月に1回ずつ北海道、東北、北信越の高校を各月に計10チームずつ呼び、設備の整った施設や阿南市の海水浴場を使った砂浜トレーニングや10チームと地元の高校2チームを入れて、総当たりの試合を行う。
- ・夏に高校の2軍の大会を行う。部員数や秋～春の戦績を参考にして、全国から32チームを選出する。

(政策評価の基準)

- ・参加チームからの甲子園出場5チーム以上
- ・2軍の大会もテレビ放送されるようになる

3. まとめ

2020年東京オリンピックでは、500近くのキャンプ地が必要とされており、東京オリンピックとはいうものの、日本中のどの地域でもオリンピックを当事者としてかかわるチャンスがあり、徳島県阿南市を「野球」のキャンプ地にし、この町を野球の聖地にし、阿南市といえば「野球」となるようなブランド力を高め、町の子供から高齢者、町外や県外の人たちまで野球を通じて、みんなで阿南市を支えるような町づくりを、私たちは企画をした。

キャンプ地にして、海外のチームと交流試合の開催や交流プログラム、阿南市で地方の試合経験数が少ないチームや冬に練習困難のチームのために合宿や試合を行うことで、地方のチームや試合に恵まれていない2軍チームの課題を改善でき、さらには、阿南市の交流人口や活動人口も増やすことができ、阿南市を含め徳島県の活性化につながることを企図している。

参考文献

- ・野球のまち阿南 公式ホームページ <http://baseball.city.anan.tokushima.jp/top.htm>
- ・間野義之、(2015)「奇跡の3年 2019・2020・2021 ゴールデン・スポーツイヤーズが地方を変える」徳間書店